

楽しい青葉山・八木山フットパスづくり ～鉄道利用促進MMから交通まちづくり推進へ～

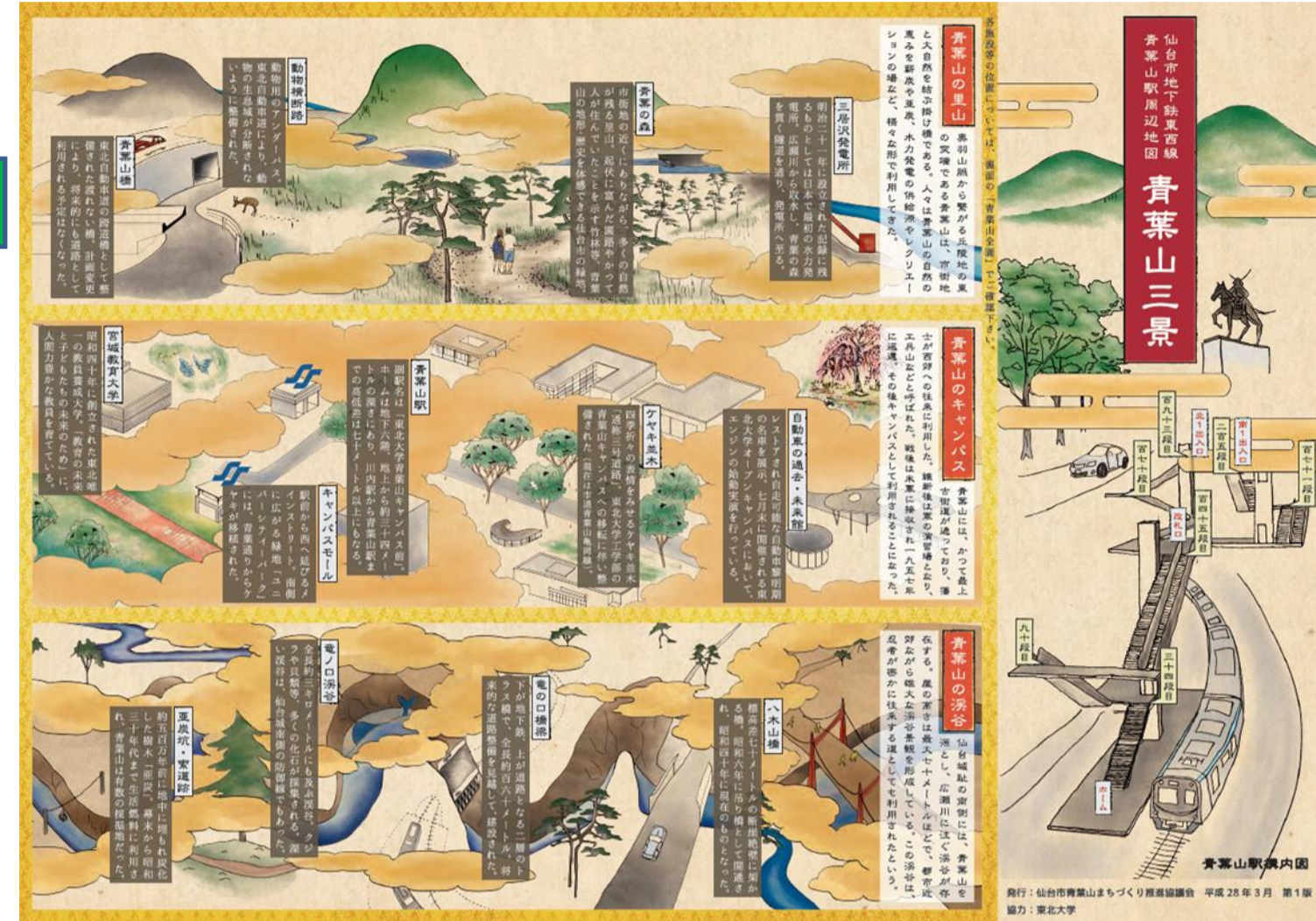
発表者：岩崎裕直（公財）仙台市建設公社常務理事
（青葉山・八木山フットパスの会世話人）

背景と経緯

- 平成27年(2015年)12月6日仙台市地下鉄東西線が開業、この機会を捉え利用促進MMとして各駅周辺散策マップ作成等展開
- 平成28年(2016年)3月青葉山駅周辺散策マップ「青葉山三景」作成、同年5月地元紙で報道(参照⇒)
- 同年6月地元町内会と隣接大学関係者が、マップ作成を通じて地域の魅力を再発見し、顕在する魅力を散策しながら触れあえることができるようフットパスづくりが必要不可欠と共感し、多くの市民に魅力を楽しく体験できるような活動を開始
- 上記マップの影響受け仙台市八木山市民センター中心に八木山動物公園駅周辺散策マップ作成(参照⇒)
- 同年11月近隣の八木山地域の町内会や関係団体そして活動に参加した市民有志らで「青葉山・八木山フットパスの会」(会員数24名)が発足
- 平成29年度よりまちづくり活動助成(仙台市)受け本格化

青葉山駅周辺散策マップ 「青葉山三景」

(仙台市青葉山まちづくり推進協議会作成2016年3月)

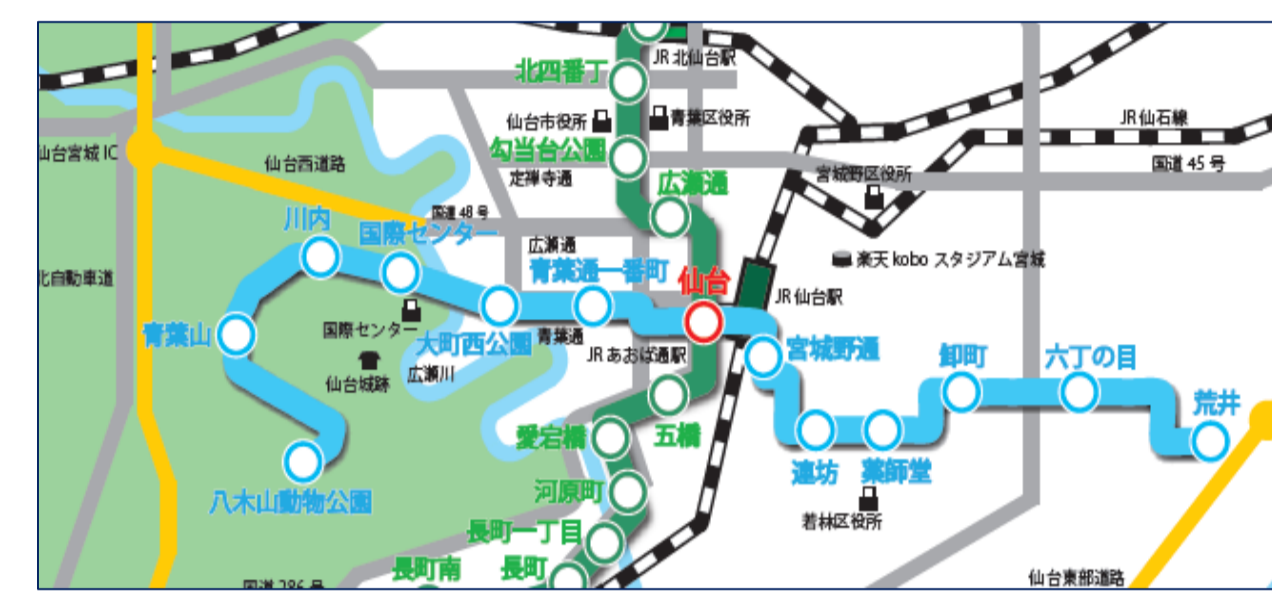


青葉山の自然・歴史満載



地元紙報道

(河北新報夕刊 2016年5月23日)



(参考：地下鉄東西線路線図=出典：仙台市交通局)

目的と効果

- ①ワークショップや清掃などフットパスづくりの活動を通して、両地区の交流が促進されると共に地域自慢の魅力を発信でき、まちづくりに貢献する。
- ②鉄道駅から歩いて5分足らずで雄大な自然に触れることができ、鉄道利用促進のほか外出率向上にも貢献する。
- ③多くの市民に魅力が伝わることで観光利用面で促進されるだけでなく、訪れる方々の健康増進にも貢献する。
- ④さらに生涯学習面だけでなく小学生の自然観察や郷土史学習にも役立つ。

青葉山・八木山地区位置図



①青葉山住民・学生によるマップづくりを通じた地域の魅力の再発見



青葉山の魅力を話し合う 豊かな自然を体感する 青葉山の生活を知る 地域の歴史を聞き取る

これまでの主な活動内容

②公募によるフィールドワーク・意見交換会を4回開催(平成28年度)



01 2016.6.11 青葉山丘陵の古道を歩く 参加者：21名
02 2016.9.20 青葉山・八木山の植生に触れる 参加者：25名
03 2016.11.26 青葉山・八木山の地質を知る 参加者：28名
04 2017.2.4 青葉山・八木山の自然に関わる 参加者：21名

③フットパスづくりの発信(平成28年度広報紙4回発行)



八木山動物公園駅周辺散策マップ 「八木山今昔」

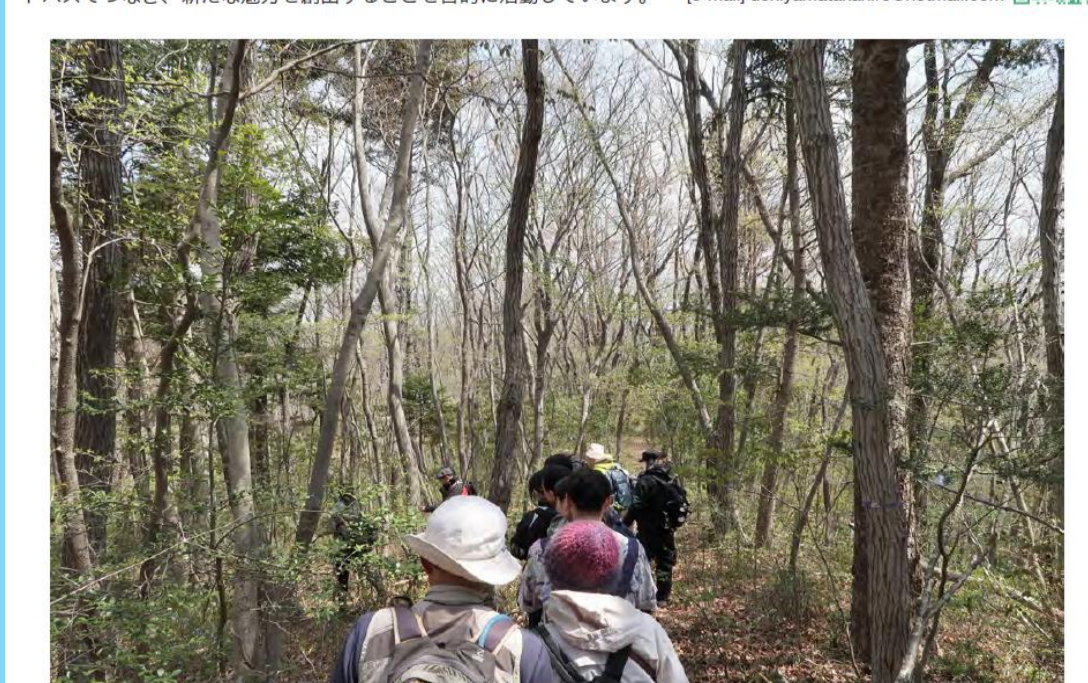
(仙台市八木山市民センター作成2017年2月)



News!

青葉山・八木山フットパス通信 01

2017年5月22日発行。今年度最初のフィールドワーク「八木山・八木山」を開催しました。今回は、緑豊かな自然の中を歩くフィールドワーク(公民館利用)にご参加いただき、大変、お楽しみをありがとうございました。また、お楽しみをありがとうございました。また、お楽しみをありがとうございました。



青葉山・八木山のフットパスづくりが本格始動します！
青葉山・八木山をつなぐフットパスづくりは、地元住民の皆さんから始まりました。2016年9月の開催は、「電ノ口・青葉山フットパス」(公民館)として行われ、21名が参加しました。今年度は、準備期間からフットパスの実現に向けたより具体的な活動を行っていきたく考え、タイトルを「青葉山・八木山フットパス」に変更し、公民館から市民センターへ会場を移しました。今年度は、フィールドワーク(公民館)と「ワークショップ」を交互に開催する予定です。フットパスの魅力を伝えるための活動を発信していきます。

2017年5月22日発行は、今年度最初のフィールドワーク「八木山・八木山」を開催しました。今回は、緑豊かな自然の中を歩くフィールドワーク(公民館利用)にご参加いただき、大変、お楽しみをありがとうございました。また、お楽しみをありがとうございました。

青葉山・八木山フットパス通信第1号
(2017年6月発行)

まとめ

- ①青葉山・八木山に既に存在する個々の活動や魅力的な場所を、フットパスづくりにより結びつけ新たな価値を生み出すことに本事業の新規性及び創造性がある。
- ②両地区で既に活動している自然科学研究団体等とも連携して散策を行うことで、各々の知見が共有され、分野を越えた新たな青葉山・八木山の楽しみ方が可能となる。
- ③様々な管理区分によって分断されたこのエリアを関係者の協力を得ながら、横断的に利用可能にすることで、フットパスを軸とした新たな資源活用策に繋がることが期待される。このように、住民が中心となり大きな開発を伴わない、ありのままの地域資源の楽しみ方を発見していく取組は、まちづくりを進める上で今後展開が見込まれる。
- ④地下鉄駅から歩いて5分足らずで電ノ口峡谷の大自然の中に佇むことができることは観光面でも魅力ある事業であり継続が重要
- ⑤最近課題となっている外出率向上促進にも貢献する取組である。